







第**74**号 平成22年 8月2日

仙台市小学校長会

発行者/小野 英男(会長) 責任者/佐々木浩二(広報部長)

主張

自律の教育



会長 小野 英男 (古城小学校)

平成23年度の新学習指導要領の全面実施に向けて、今年度はその移行期の最終年度である。各学校とも指導時数の確保や学習活動の充実等に、鋭意努力し学校力を高める取組が求められている。必要な教職員の配置等の課題は多くあるが、円滑な実施のために、我々校長は地道にかつ大胆に取り組むことが肝要である。今こそ校長は、学校課題解決のため、経営ビジョンをしっかりと確立し、その解決のための取組にリーダーシップを発揮して、全力で立ち向かうことが重要である。まさに、校長の学校経営手腕が、問われていると言っても過言ではない。

ところで、教育改革が進行している現状の中にあって、社会や時代の要請を受けた成果と課題をきちんと整理し直す作業が必要との考え方がある。教育委員会では教育振興計画を策定し、市民にも教育の指針を明確に示すこと、一方、学校現場ではその方針をどのように受け止め、教育課程に位置付け毎日の教育活動を展開していったらよいかというようなことがその一例である。

このような考え方が提起される背景・根底には, 全国的な学力低下・真に開かれた学校の在り方・子 供と向き合う時間の確保等の問題が横たわっている と考える。

特に、子供と向き合う時間の確保に関しては、業 務の見直し、会議の精選とか会議そのものの運営の 工夫を始めとする様々な取組が、既に学校現場においては実践されている。各学校の実情に対応しているので、一概には論じられないと思うが、組織として教職員の理解を得て学校経営を進め、成果を上げている学校が数多く出てきたと認識している。各校長には、今後とも誇りと自信をもち学校経営に当たってほしいと願っているところである。

そこで、学校経営の核に押さえておくべき事項として、「教育の自律」という点について、子供たち・保護者・地域等の視点でもう一度考えてみたいと思う。その理由は、自分だけがよければそれでよいという風潮が、依然として残存している事実があり、我々が学校経営をする上でも頭を悩ませているのではないかという危惧からでもある。小学校での学級崩壊の低年齢化、理不尽な保護者の言動などの実態も、この自律の精神を育て相手のことを尊重することの教育の不十分さが影響しているように思われる。

以前は、子供は社会の宝物であり地域で育てられる存在との考えが当たり前の時代だった。他人の子供が悪いことをしても、今は見ても見ぬふりである。

教育は常に大きな夢を抱き,現状改善の努力を惜しんではいけない。その際,教育の原点・不易な部分として,「自律」の精神を組織・個人を問わずに再認識して対応することが今こそ重要であると考える。

おもな内容			
○主 張	1	○提 言	3
○特色ある教育活動	2	○退会者随想	1 (
○学区自慢	6	○編集後記	20

館小ブランドの創造

館小学校 白鳥 裕子

1 学校の概要

昭和63年4月1日開校。東経140度48分,北緯38度19分,標高93mに位置し、南に小高い山々、西に住宅地と森林の丘をひかえ、自然の緑に恵まれた静かな環境にある。団地の発展とともに転入児童も多く、平成6年に南校舎が完成した。

平成10年,開校10周年時は児童数760名。平成20年,開校20周年時は630名で,現在は600名と減少傾向にある。

開校以来団地内には小・中各一校。地域の特性を 生かし、日常的な交流を柱とした小・中連携に取組 中である。

2 実践例

(1) 小・中連携(日常的な交流を柱として)

※平成18・19・20年度,文部科学省「新教育システム開発プログラム」採択事業『基礎学力を目指した仙台型小中一貫教育のモデル構築』指定。

【平成20年度】



図工~1年生(粘土)



図エ~ 6年(浮き彫り) T T



中学校部活見学



小学校教諭が中学校で道徳授業

『その他の連携』

- 特別支援学級小中交流会
- 2 年図工~粘土(TT)
- ・3・4年理科~「私の研究」教材研究
- 4年図工~版画指導
- ・5年理科~中学校理科教諭と教材研究&授業

【平成21年度】



図工・美術合同授業(小6・中2)~光と影

教材研究

『その他の連携』

- 特別支援学級小中交流会
- 市小体陸上練習
- •「仙台自分づくり教育」発表
- 「地球のステージ」合同鑑賞(小6,中学生)
- 部活動支援(剣道)
- (2) 子供会育成会と連携(安全安心な学校づくり)
- ※子供会育成会は地域に根ざした組織。また、学校 で取り組むことの難しい活動を企画運営。

《当校課題》校区育成会加入率年々低下。単位子供会で加入率に開きが見られるようになった。(高~80%,低~20%)

《取組》校区育成会の組織改編を行い、育成会をPTA組織に組み入れ(臨時総会開催),青少年健全育成の部分を手厚くした。(全職員と保護者で児童を支援)

【平成21年度】

・集団下校体制~学年ごとの下校体制と災害時に備 え単位子供会ごとに集まる。(地区担当教諭学級)

【平成22年度】

・集団下校体制に備えて、単位子供会ごとにたてわり班編成。そして、たてわり活動と下校を実践。





3 おわりに

小中・育成会と連携を重ね、中学校・保護者・地域と日常的な交流を通しながら、地域の特性を生 (活)かした「館小ブランド」の創造に努めたい。

「地域共生科」を核とした学校経営

七北田小学校 内藤 惠子

歴史と、副都心として発展中の顔とを併せもつ本 校学区は、住民の流動性が激しく様々な価値観や生 活様式をもった人々が共存している地域である。転 出入が多い本校では、児童の将来を見据え、全国ど こでも、これからの知識基盤社会で必要となる生き る力を「自己実現しつつ他者や社会と共に生きる力 =共生」ととらえ、他者との関係性を重視し現実社会 を志向した教育の実践を研究課題とすることとした。

3 か年の文部科学省研究開発学校の指定を受け、 新教科「地域共生科」の創設と教育課程の編成を指 向して 2 年目である。

1 創設教科「地域共生科」とは

- ① 社会の中でよりよく生き、よりよい社会をつくる資質と能力の育成を観点に「育む力」を明確にし、児童の自己肯定感の高まりと学習の社会的意義の実感を大切にする。
- ② 地域社会と深くかかわる学習や体験活動を重 視,学習のフィールドを「身近な地域社会」と する。
- ③ 学習ステップを「地域を知る」→「地域を調べる」→「地域を考える」→「地域に発信する」
 →「地域で行動する」で構成、地域社会に実際に参画する活動までを学習過程とする。
- ④ 地域の教育力を積極的に活用し、地域社会と 学校の学びの循環をつくり、最終的に地域の活 性化に貢献することをねらいとする。

2 「地域共生科」を核とした学校経営

教育目標「創造的な知性とたくましい心と体をもち,自分らしさを発揮しながら,共に生きる児童の育成」を具現化するために,各教科・領域と「地域共生科」の位置付けを明確にした教育課程の編成を試みている。



地域の教育力を積極的に活用する「地域共生科」では、同時に指定を受けた「学校支援地域本部」を活かし、地域連携担当とスーパーバイザー、地域コーディネーターが協働し、地域人材を積極的に活用している。地域性を活かした行政・市民センター・大学、既存の地域ネットワーク等、外部人材活用は教育活動全般にわたり、「学校支援地域本部連絡協議会」は学習活動の計画・支援・評価にまでかかわっている。それにより、「協働型学校評価」の導入はスムーズであった。

3 取組の実際

全教員がプロジェクトに所属し,研究推進している。

- ① 地域共生科学習プログラム創造プロジェクト 1年生「まつりだわっしょい!!inななきた」
- 2年生「ようちえん・ほいくえんにいこう」
- 3年生「おじいちゃん おばあちゃん わたしたち」
- 4年生「すぎだっちゃ七北田!」
- 5年生「よりよい未来を思い描こう」
- 6年生「私たちでつくろう 住みよい七北田」 特別支援「わたしたちの町」
- ② 学習指導要領作成プロジェクト
- ③ 指導方法プロジェクト
- ④ 評価方法プロジェクト

4 今後に向けて

昨年度は、試行錯誤の年であったが、目に見える成果が実感できた1年でもあった。先生方の創意工夫のすばらしさ、地域住民からの歓迎の声、保護者の学校支援の増加、何よりも子供たちの生き生きした姿がうれしい。

今,学校に寄せられる期待や要求は膨らむ一方である。多忙化に教育現場が疲弊している現実も否めない。地域の教育力の活用による学校と地域の学びの循環が,多忙化軽減と学校と地域・保護者の間に見え隠れする不信感の解消,そして,学校現場の自信回復につながることを期待する。地域・学校が一体となって将来を担う子供たち一人一人に本物の生きる力を付けるよう,実践を積み重ねていきたい。

11月の中間公開への参加とご指導を賜りたい。

ESDを意識した環境教育

(Education for Sustainable Development=持続発展教育)

中野小学校 伊藤 公一

1 はじめに

本校は、学区内に世界でも有数の渡り鳥の休息地として知られている「蒲生干潟」があります。この干潟は、オーストラ



リアの越冬地とシベリアの繁殖地を行き来する,シ ギやチドリの中継基地です。蒲生干潟では,国内で 観測されている542種の鳥類のうち273種類が確認さ れています。中でもシギやチドリ類は,国内で見ら れる76%が飛来しています。本校は,蒲生干潟及び 七北田川周辺の地域をフィールドに環境教育の実践 を行っています。この活動は,27年間続いている教 育活動です。

2 実践例

①【バードスタディ】

環境教育のメイン活動は『バードスタディ』です。 全校で行う夏鳥と冬鳥の観察学習がバードスタディ で年2回実施します。本校で制作した観察ブック『蒲 生干潟の野鳥』に、その日に観察した鳥の種類や場 所を記載します。この観察ブックは6年間使用しま す。その他に、各学年で生活科や総合的な時間の計 画に基づいて蒲生干潟に出かけ、季節の水生生物や 水質を調査・記録しています。

②【鮭の地引き網】

21年度から、新たに鮭 の放流活動にも取り組ん でいます。七北田川を遡 上する鮭を地引き網で捕



獲・採卵して、ふ化した稚魚を七北田川に放流する 活動です。子供たちは、ふ化した1000匹以上の稚魚 を毎日観察し、放流を楽しみにしていました。

③【清掃活動】

蒲生干潟を守る活動として、クリーン蒲生・海 岸清掃・干潟清掃等を実施しています。クリーン



蒲生は高砂老人クラブと海岸清掃は中野小PTA と干

潟清掃は地元企業のキリンビールとそれぞれ共同で 実施しています。協力して蒲生干潟のゴミを拾い, 自然を守る気持ちをはぐくむ活動です。

④【クリーンデー】

毎月1回以上,朝の活動の時間に,学年ごとや活動グループで校庭のゴミ拾いや除草作業をしま



す。雑草や枝は、給食の野菜くずなどと一緒に堆肥にします。作った堆肥は、サツマイモ畑や花壇に施して、リサイクルしています。また、クリーンデーには、花壇に花を植えたり、畑にサツマイモの苗を植えたりします。秋に全校児童でサツマイモを収穫し、ポテトチップやスイートポテトの給食として食べます。

⑤【和紙作り】

6年生は、環境保全の ためには、ある程度人間 の手で自然を守る必要が あることや葦が水を浄化



する働きがあることを学習します。その後,12月に 蒲生干潟の葦を収穫し,6~7時間煮て繊維を柔ら かくした後で,牛乳パックを粉々にして団子状態に したものと混ぜ合わせて紙をすきます。すき箱で「手 作り和紙」をすいて,葉書や栞に仕上げます。21年 度は,すいた和紙の栞にお礼のメッセージを書いて, 卒業式に出席されたご来賓の方々全員に差し上げ, 先生方にも配りました。

3 おわりに

本校の環境教育の実践 は、環境教育大臣賞など 多数の賞を受賞していま す。この実践を更に深め



るために、20年度から環境教育部門でユネスコ・スクールに加盟し、ESDを意識した環境教育に取り組んでいます。この実践も諸外国の同加盟校で国際的な評価を受け、21・22年度と韓国や米国(2回)で環境教育実践の発表の機会が与えられました。

「小学校生活を緩やかにスタート」させる取組

連坊小路小学校 荒井 早苗

1 はじめに

大きな環境の変化が起きる入学時の子供たちが, この時期を安心感をもって落ち着いて過ごせるよう にと考え,「小学校生活を緩やかにスタート」させ る取組を始めてから今年度で3年目を迎え,システ ムとしてもしっかり定着してきた。その概要を紹介 したい。

2 概要

◇ねらい

- 子供たちの実態を見取った学級編制を行う。
- ・社会性を育てる指導を通して、幼稚園・保育 所(園)生活から緩やかに小学校生活に慣れ させていく。

◇具体的な4つの取組

- ① 担任による子供の見取りを基本とし、地区別の編成であることから顔見知りであったり通学路を確認しあったりする意図で、4月の約1か月は地区別の学級編制とする。
- ② 担任全員が同じ目線で学年の子供の実態を 見取ったり、学校の共通のルールを互いに確 認したりする意図で、3日ごとの担任ロー テーション制とする。
- ③ 学級活動の時間を中心に、社会性を身に付けさせる指導や、生活科・各教科・領域で小学校での学習や生活の約束、友達とのかかわり方などを身に付けさせる。
- ④ 個別に配慮や支援を必要とする児童もいることから、担任一人では徹底しきれない面もあり、ボランティア(生活・学習サポーター)の方々に見守っていただくことで子供は安心感をもって学校生活をスタートさせることができる。

3 生活・学習サポーター(お母さん先生)について

- 2月に一般公募し、春休みに事前説明会。
- 「お母さん先生の一日」支援マニュアル配布。
- ・お母さん先生の学級配置は固定。

学習予定表を毎日配布。

- ・ 始業前と放課後の綿密な打ち合わせ。
- 「子供との距離感」の保ち方は、文字では伝え きれないので経験者からこつを伝授してもら う。
- 担任は遠慮しないで指示をどんどん出す。
- 守秘義務の徹底については、くどいぐらいに説明する。

4 社会性を育てる指導のポイント

- ・社会性を生活習慣・学習習慣、コミュニケーションスキルと定義して指導する。
- ・身に付けなければならない社会性の優先度に基 づいて、その日の重点スキルをその日ごとに設 定する。
- ・生活科を含めた各教科との合科的な関連も重視 する。
- ・他学年少人数や管理職もスタッフに加え,全校 体制で取り組む。

5 見えてきた成果

- ・生活・学習サポーター(お母さん先生)との心のつながりができ、子供たちは安心感をもって入学期の学校生活を送ることができている。
- ・同じマンションに住んでいても出身幼稚園が違うと子供同士遊ぶ機会がなかったが、地区別の編成で親しくなり友達になったりなど、地域のコミュニティー形成にも一役買っている。
- ・サポーターの声として一番多いのが、「自分の 育児に生かすことができる」であり、自らを学 びの場としている真しな思いにあふれている。

6 おわりに

何よりも、教室が開かれた状態になり、互いに子 供の見取りや指導方法などを学ぶ場となっている。 今後さらに改善を加えながら、確固としたシステム に仕上げていきたい。

学区自慢

「いぐね」に守られて

七郷小学校 米倉 清幸

国道4号線バイパス蒲町交差点から荒浜に向かうと南側に緑の木立群が現われる。家屋を包み込む、この木立を親しみを込めて「いぐね」と呼ぶ。「いぐね」とは、風雪から家屋を守るためや、食料や建材、燃料として利用するために敷地を取り囲むように植えられた屋敷林のことである。本学区の長喜城地区である。田園の中に浮かぶ緑の島のような木立群は、かつてはどこにでも見られる農村の風景であった。しかし、都市化が進む仙台の中で、緑の防波堤のごとく、それを維持し守り続ける方々がおり、本校の子供たちにとっての学びの礎になっていることは、大きな自慢でもある。

本校は今年度児童数1,026名,市内で最も児童数の多い学校である。10年後には1,400~1,500名の児童数になるとの予測もなされている。平成27年開業予定の地下鉄東西線の起点である荒井駅,車両基地の工事も進められている。新しい住民の方々が増え、学区の様相は大きく変貌しつつあるが,明治6年6

月24日に開校して以来の長い歴史と伝統を守り、生かすことができる基盤のある学校である。

総合的な学習の時間では、3年生は「いぐね探検 隊」として木立の夏の涼しさを味わい、4年生は「発 見大豆のひみつ」として、大豆の栽培から豆腐や味 噌造りを体験する。5年生は「おらほの田んぼ」に 取り組み、米作り・収穫祭・わら細工に臨んでおり 6年生は「わたしたちの七郷」として、歴史や様変 わりする学区の学習を通して、児童なりの地域への 思いを発信する。その間,多くの地域の方々と触れ 合い, 教えをいただき, 学校や地域への愛着も深まっ てくる。文化クラブでは神楽の指導に,毎回3~4 名の方がお出でになり、春・秋の祭りには児童の出 番もつくってくださっている。ボランティアとして 学校を支えてくださっている方々も多い。毎週火曜 日の読み聞かせには30名程の方が参加してくださっ ており、1年生の生活・学習サポーターは17名の方々 に協力いただいている。下校時には毎日防犯ボラン ティアの方々が学区を巡視してくださっている。同 窓会の方々の協力も大きい。「いぐね」のごとく、 本校を包み込む地域の方々の温かな思いが何よりの 自慢の学校である。

学区自慢

地域コミュニティーづくりを通して

郡山小学校 佐藤 悦朗

県から仙台市に入ってきて、いくつか驚くことがある。その一つが学区民運動会である。県郡部の小学校を回って来た私にとって「学区民運動会」という言葉には、児童数が減り学校単独では運動会を開催することが難しくなったため、地区民と合同で運動会を開催するというイメージがあった。ところが仙台市では児童数に関係なく学区民運動会を実施している学校が予想以上に多いのに驚いている。

さて、本校の学区民運動会は、6月6日(日)に 実施された。前日の大雨はきれいに晴れ上がり、雲 一つない絶好の運動会日和であった。この地域でこ れだけの人が一同に集まることは、この運動会しか ない。まさしく地域コミュニティー最大のイベント である。この最大のイベントを企画・運営する組織 が、学校と体育振興会とPTAで構成する実行委員 会である。この委員会には、地元選出の市議会議員 さんや町内会長さんはじめ、体育振興会の役員、お やじの会のメンバー、PTAの会員、ゲストティ チャーとして子供たちに野菜作りを指導している元 PTA会長さんなど、学区内のコミュニティー構築 に日頃から尽力している方々が名を連ねている。そ の方々が実行委員となり、地域コミュニティー最大 の行事、学区民運動会が開催されるのであるから、 あれだけの人が本校の校庭に集まったのである。

学区民運動会のほかに、夏祭りや地区子ども会の 花いっぱい活動、地区挙げてのクリーン・ウオーク など様々な地域活動が行われ、子供たちが参加した くなるような工夫がたくさんある。町内会の座談会 に子供を代表して6年生が参加し、意見を発表する 機会もあった。郡山小学校区には、今もなおたくさ んの自然が残り、子供たちも地域の人たちも大変穏 やかなところである。それは、たくさんの地域活動 の中に子供たちが活躍できる場をいつも設定しても らっている地域コミュニティーづくりの成果でもあ る。実際の「大人・社会」を通した生きた学びの社 会体験が行われている。学区民運動会やこうした地 域づくりの実際に触れると,郡山小学校区には学校・ 家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子供たちを 育てる機運と体制が確立していることを確信する。 これが、私の学区自慢である。

学区自慢

天空の郷 八木山

八木山小学校 伊藤 弘行

「八木山物語」(河北新報社発行)によると、本校がある八木山(越路山)は、大正の末ごろに5代目八木久兵衛氏により総合的な開発が行われた地域であったと記されています。当時、海抜150mある高台(現在の動物園のアフリカ園の辺り)からは、東に牡鹿半島に至る太平洋が望まれ、西に太白山や蔵王連峰、北に七ッ森や泉ヶ岳が見えるというまさに天空の郷だったようです。今でも学校の屋上からは、その当時を思わせるような景色を見ることができます。

本校の開校(昭和46年)と同じ年度に、八木山地 区連合町内会が組織されました。それ以来、八木山 地区連合町内会の方々には本校の教育活動を理解し ていただき、これまで多大な支援や協力をいただい ているところです。

特に今年度は、本校の特色ある教育活動の一環である「なかよし活動(縦割り活動)」に、各町内会長さんをお招きして、子供たちの活動を参観してい

ただきました。その中で、地区の様子を話していた だいていたり、学区民運動会に向けて励ましていた だいたりと、積極的に子供たちとのかかわりを大切 にしてくださっている姿に感動させられました。

八木山学区の子供たちの健やかな成長を願う保護者や地域の活動は、多方面にわたって行われています。その中の一つに「八木山小学区子どもを守る会」があります。

この会は、PTAや連合町内会をはじめ防犯協会、 交通安全協会、社会福祉協議会など、学区内にある 23団体によって組織されています。役員数は総勢65 名おり、役員会や理事会などが定期的に行われ、年 間を通して様々な活動に取り組んでいただいている ところです。

特徴的な活動として、「ハッピーフラッグ(毎月 第二週目に黄色の旗を門前に掲げる)」や「昇降口 まもらいだー」「緊急時みまもりたい」などの活動 や年2回の広報紙の発行などが挙げられます。

本校の子供たちが、日々落ち着いた生活を営むことができるのも、長年受け継がれている地域の温かいまなざしのおかげだと思っています。

学区自慢

学区の自慢の一番は「人」

国見小学校 中山 純一

学区について自慢できることがたくさんある本校ですが、その一番目は「人」です。

昨年度147名,今年度165名(うち東北福祉大学チームゼロ12名)。これは、ご登録いただいた防犯ボランティア巡視員の数です。

5月に行った運動会当日の早朝のことです。前日の大雨で会場準備ができませんでしたので早めに出勤しましたら、校庭の水とりを自主的にしてくださっている地域の方の姿がすでにありました。子供たちが少しでもよい状態の校庭で運動会ができるようにという思いの表れです。子供たちを地域で見守り、みんなで育てようという気持ちの強い方がたくさんおいでになります。3年生の総合の中でご指導いただいている郷土史家、5・6年生の版画のご指導をいただいている郷土史家、5・6年生の版画のご指導をいただいている版画家、バイオリニスト等、いずれの方も子供たちのため、学校のためを思っての方ばかりです。

また, 東北福祉大学や東北文化学園大学等の学生

20名のみなさんにも学習支援のボランティアとしてご協力いただいております。

さらに、夏の学校キャンプや秋の焼き芋、芋煮会 といった子供たちにとって楽しい企画を始め、何か につけ協力してくださる国見パパス(親父の会)と PTA本部役員のみなさんも自慢できる存在です。

次に,「物的なこと」についてです。

具体的な体験を通してこそ学ぶことがたくさんある子供たちです。消防署, 浄水場, ごみ処理工場がいずれも学区内にあり, 往復に時間をかけずにすむので学ぶ時間を確保できる利点があります。

また、広瀬川、権現森から続く丘陵の森、大崎八幡宮の緑など、自然がまだまだ残っており、体験学習の場であると同時に野鳥のさえずりを聞きながら学習できることも恵まれているところです。

さらに、青葉城築城の際に石垣の石を切り出した 跡やその石を運んだ牛が苦しさからうなったと言われる唸坂など、名所旧跡の多いことも挙げられます。

以上, 自慢できることを述べさせていただきましたが, これらを本校の教育に生かしながら特色ある教育を進めているところです。

提言

提言周辺

私の手元に一枚の新聞記事の切り抜きがあります。

それは東京都新宿区立戸塚小学校に「鉄腕アトム」 が20人の新入生と共に入学したというものです。

「区の特別児童にも任命された。今後学校行事などにも顔を出す。ただ、永遠に子供の姿なので進級や卒業は考えていません。(区教委)」(朝日新聞 4 月7日朝刊コラム青鉛筆より)とのこと。そして、愛らしくもりりしい児童の数倍分の大きさのアトムが他の新入生と共に小学生用の黒い学生服を身につけて写真におさまっています。

アトムは2003年4月7日高田馬場の科学省で誕生 したことにちなんで、小学校とPTAが発案し区教委 も後押しをしたということになっているようです。

なんて粋な計らいでしょうか。心服しました。

できる,できないは別にしてこのような心のゆと りというか「遊びしろ」を私も心がけたいと思って います。

そこで、私は今年度取り組みたい実践テーマとして大それた言い方をすれば「心育て」,簡明に言えば、

1地区会長 狩野 継比古(金剛沢小学校)

学校内外の「環境整美」とし、後戻りができないよ うに職員会議で宣言を行い自縛いたしました。

大したことをしている訳ではありません。

「気ままな博物誌」というコーナーを理科室前に 作りました。そして植物や動物の面白そうな実物見 本から石井桃子展を見てきた感想などの展示をしま した。また、斜め放題になった傘立ての傘をこっそ りと整えたり、図工室の凹凸著しくも汚れきった工 作台を用務主任さんの協力をいただき安上がりで再 生したりしています。PTAに働きかけて水槽を購入 してもらい、環境委員会の子どもたちの発案に任せ て生き物を飼うことにしています。本校社会学級と 読書ボランティア「コスモス」に話しかけて,たま たま知っている児童文学の翻訳家を講師に招き6月 下旬にお話会を開いてもらうことにしています。ど こかで子供たちの心育てにつながればと思っていま す。もともとが非力な私ですので肩に力の入りよう がないのですが、目立たぬようにこっそりと「心育 て」の一端を実践し続けたいと企んでいます。

提言

若い教師を育てる環境づくり

若い教師を育てることが難しい時代になったのか 思うときがある。

子供には老若男女を問わず、様々な教師と出会い、いろいろな人柄や考えに触れ成長してほしいと願う。むろん、教師はだれでもいいのかというとそうではない。教師としての、前提は「よく学ぶもののみが教壇に立つことが許される」(「教師花伝書」佐藤学著)である。

昨今,教員養成学部が新設され実習生が増えた。 また,教育実習が卒業単位になり実習期間が伸びた ところもある。新任教師も実践力・即戦力が求めら れている。一方,「今日のように教育改革がかまび すしく言われ,学校が混迷と混乱の渦に巻き込まれ ている状況において(前出;佐藤学)」実習生の指 導に負担を感じてしまうのも確かである。

しかし、我が来た道である。また、来春その実習 生がわれわれの同僚となる可能性がないわけではな いのだ。ならば、どんな教師になってほしいか、自 分自身が先輩教師として、後輩のあるべき姿を願う だろう。

校長は、己を含め、教師になったとき、あるいは

2地区会長 菅原 耕一(立町小学校)

なろうとしたときの初心を思い浮かべるよう常々声 をかけていかなければならない。

そして, 若い教員の意欲を大いに認め, 励まして いきたいものである。

指導の技術は未熟でも、年齢的に近いというだけで、子供たちは親近感をもってくれる。私の小学校高学年の時担任だったO先生は大学を出て3年目だった。放課後はソフトボールをいっしょにやってくれた。先生は社会科が得意でいつもプリントを用意し、調べ学習の発表の場を用意してくれた。意欲的な子供に育てたいという先生の思いを強く感じることができた。

今の若い教師に接すると、教師として成長したいという思いを強くもっていると感じることができる。身銭を切って研究会に進んで参加したり、大変な準備をして授業を公開したことをよかったと自分の成長として確認できたりしている。最近の教育機器を使いこなすのは若手である。経験者も若手も互いに学びあえる仲間意識の強い人間環境でありたい。

提言

共に歩む時

私の名札のケースに、小さな四つ葉のクローバーが入っている。「おはよう。」のあいさつを交わしながら子供たちを出迎えている朝、3年生の女の子が「きのう見つけたの。」と言って手渡してくれたものである。

いろいろな表情で登校してくる子供たち。一人一人の違いがあり、日々によっても変化する。「みんなちがって、みんないい。」は、私が子供たちに語りかけている思いの一つである。二つ目は「よいところを見つけよう」、三つ目は「よいところを伸ばそう」である。4月に子供たちに話すことで、お互いに認め合うことの大切さを伝えてきた。同時に、先生方へのメッセージでもある。

私は、小さなことでも一つ一つを具体的に語れる 教師でありたいと常に思っている。そのために、じっ と見つめていることがある。一人一人の違いを認め ながら、よいところを見付けていく活動は、かけが えのない仕事である。子供の発想の豊かさや表現の おもしろさに感心させられることがいっぱいある。 その具体的な場面を取り上げながら、担任と語るこ 3地区会長 菅原 修(上杉山通小学校)

との喜びは、また格別である。学校の実現すべき目標に近づいていることの発見はなおさらうれしい。

「教育は人なり」という。教師は多くの場面でのかかわりを通して子供たちの成長を促している。具体的に成長の証を見つけたときの喜びは何にも代え難い。小さなことの積み重ねが一人の人間としての存在感をより大きなものにしていく。教師は実に不思議な力をもっていると思っている。

今,教育に関して誰もが語り、いろいろな視点から厳しくとらえられたりもしている中で、真に教育を推進する仕事に誇りをもって取り組んでいける環境づくりをしっかりとしていかなければと思っている。「笑顔」「かかわり」「学び」は私のフォトテーマであり、教職員や子供たち、保護者や地域の方々とのふれあいのテーマでもある。一コマの写真から語る喜びをいっぱい見い出し、共に歩むことの喜びを感じ取っている。

ある時は春風の如く,ある時は秋霜の如くかかわりながら,自らも鍛えつつ確かな歩みを続けたい。

[提言]

「地域連携」は,継続こそ大切

仙台市立の学校は、今大きく変わりつつある。

平成21年度に「杜の都の学校教育」推進の基盤として『地域とともに歩む学校』を掲げ、さらに、学校評価委員会の設置や協働型学校評価を活用した学校づくりを目指すことにより、地域連携を一層推し進めることになった。これは、仙台市が文部科学省の指定を受けて研究に取り組んできた学校評価の集大成とも言えよう。

さて、我々校長は、勤務校の発表を受け、それぞれの学校の現状や課題を引き継ぎ、その継承や解決 策等を講じると共に、その時々の教育課題とも正対 しつつ学校経営に取り組むことになる。

その際、ともすると目の前の課題に心血を注ぐ一方、その学校が歩んできた道筋や開校当時の地域住民の思いや願いを振り返ることを忘れがちである。それぞれの学校にはそれぞれの歴史があり、そしてその地域には、脈々と受け継がれている学校へ寄せる思いがあることを忘れてはいけないだろう。周年行事の時だけではなく、その学校に就いたら、先ずその学校の歴史を知ることから始めたい。地域連携

4地区会長 菅原 泰 (泉ヶ丘小学校)

も、その上でのことではなかろうか。

よく「校長が替われば学校が変わる。」と言われるが、この言葉には一理あるとは言え、こと地域連携に関しては、その時々で変わってしまうことは、かえって地域を混乱させるとともに、不信感すら与えかねないだろう。地域連携は継続され、受け継がれてこそ意義があるものと思われる。もちろん、連携の形や方法等については、工夫や改善が図られてしかるべきであるが。同様のことは、特色ある教育活動についても言えることだと思う。連携にしても特色ある教育活動にしても、その時の流行に伴う単なる打ち上げ花火であってはならないだろう。極端に背伸びすることなく、地道な取組でありたい。

今,各学校には、それぞれ地域連携担当者が設けられ、様々な取組が展開されているが、我々校長は、自ら先頭に立って、地域理解と地域連携に努めることが大切であろう。そして、そのようにして築かれた地域との繋がりは、しっかりと受け継がれ、継続されていってこそ、学校が地域コミュニティーの核と成り得るのではなかろうか。